

ル・コルビュジェの建築作品—近代建築運動への顕著な貢献—

摘要

四大陸 11 か国に所在する建築家ル・コルビュジェの作品のなかから選ばれた三大陸 7 か国の構成資産は、半世紀にわたって成し遂げられた成果であり、建築史上初めて、建築の実践が全地球規模のインターナショナルなものとなったことを証明する物証である。17 の構成資産は、全体として、20 世紀の建築及び社会がかかえた本質的な課題のいくつかに挑んだ顕著な対応を示すものである。新しいコンセプトを反映し、広い地域に重大な影響を与え、近代建築運動の思想を広めたという点において、それらはみな革新的であった。その多様性にも関わらず、近代建築運動は、20 世紀の社会文化的、歴史的的存在として主要かつ欠くことのできないものであったし、いまだに少なからず、21 世紀建築文化の基盤でありつづけている。1910 年代から 1960 年代にかけて、近代建築運動は、現代社会が抱える諸課題に応え、全世界規模での独特な思考の場（フォーラム）の創造や、新しい建築的言語の開発、建築技術の近代化、近代人の社会的、人間的ニーズへの対応を目指した。一連の資産は、こういった課題全てに対して行われた顕著な対応である。

いくつかの構成資産は、直ちにアイコンとしての地位を獲得し、世界的な影響を及ぼした。近代建築運動のアイコンであるサヴォア邸と庭師小屋、新しい住宅のモデルであるマルセイユのユニテ・ダビタシオン、宗教建築への革命的なアプローチを示すロンシャンの礼拝堂、人間工学的、機能主義的アプローチに基いたミニマムセルの原型であるカップ・マルタンの休暇小屋、工作連盟博覧会の一部として世界的に有名になったヴァイセンホフ・ジードルングの住宅がそうである。

他の構成資産も、それぞれの地域で思想を広める触媒となったもので、ベルギー及びオランダにおいて近代建築運動の火付け役となったギエット邸、南アメリカにおいて重大な影響を与えたクルチュット邸、地球上のどこでも適用が可能な、無限に発展する美術館構想の原型であり、日本において近代建築運動の思想を確固たるものとした国立西洋美術館、インド亜大陸に重大な影響を与え、インドが近代社会に仲間入りしたことの象徴となっているチャンディガールのキャピトル・コンプレックスがそうである。

構成資産の多くが、建築の新しい概念、原則、技術的特徴を反映するものである。レマン湖畔の小さな家は、カップ・マルタンの休暇小屋にも結実したミニマリズムのニーズの初期の表現である。ル・コルビュジェの近代建築の五原則は、サヴォア邸と庭師小屋という形で象徴的に翻訳されている。ポルト・モリトーの集合住宅は、この原則を居住ブロックに応用した見本であり、ペサックの集合住宅などにもこの原則は応用され、クルチュット邸、ラ・トゥーレットの修道院、国立西洋美術館ではその再解釈がみられる。ガラスの壁の集合住宅は、その原型をポルト・モリトーの集合住宅にみることができる。

また、構成資産のなかには、近代建築運動、ピューリズム、ブルータリズム、建築の彫刻的フォルムへの指向といった大きな流れを形成したものも含まれている。ラ・ロッシュ＝ジャンヌレ邸、ペサックの集合住宅、ギエット邸にはピューリズムの端緒がみられ、マルセイユのユニテ・ダビタシオンは、ブルータリズムの流れを推進する上でパイオニア的役割を果たした。ロンシャンの礼拝堂及びチャンディガールのキャピトル・コンプレックスは彫刻的フォルムを推進した。

建築材料の革新及び実験が、ヴァイセンホフ・ジードルングの住宅のコンクリート製の独立梁に表れている。ラ・トゥーレットの修道院には、プレストレスト・コンクリートが

使われた。チャンディガールのキャピトル・コンプレックスでは、自然空調と省エネルギーへのこだわりから、ブリーズ・ソレイユ（日除け）やダブル・スキン・ルーフ、雨水を回収し空気を冷却する反射プール（水鏡）が用いられた。標準化—完璧さを追求する取組のひとつとしての—が、大量生産を意図した試作品、マルセイユのユニテ・ダビタシオンに見られる。一方で、レマン湖畔の小さな家は、1 スパンの最小限の家の標準的な姿を示し、カップ・マルタンの休暇小屋は生活のための最小限ユニットの標準形を示すものであった。手をあげた人間のシルエットを模したチャンディガールのキャピトル・コンプレックスの外部空間にはヒューマン・スケールに基いた調和的システムとしてのモデュロールが用いられた。「機械時代の近代人」の新しいニーズをふまえて設計された建物という思想については、サン・ディエの工場の輝く新しい作業スペースがその実例である。ペサックの集合住宅のアバンギャルドな住宅や、ヴァイセンホフ・ジードルングの手頃な価格の住宅は、新しいアプローチが、社会の一部分だけのためのものではなく、むしろ全ての人々のためのものであったことを示している。対照的に、イムーブル・クラルテは、中流階級の住宅に革命をもたらすことを意図していた。ル・コルビュジエが改正したアテネ憲章は、個と集団の間のバランスという概念を推進しており、マルセイユのユニテ・ダビタシオンにその原型が見られる。チャンディガールの都市計画の焦点であるキャピトル・コンプレックスは、その原則と「輝く都市」という思想に対する最も完全な貢献であると言える。

評価基準

評価基準(i)

ル・コルビュジエの建築作品は、人類の創造的才能を現す傑作であり、建築及び社会における 20 世紀の根源的な諸課題に対して顕著な回答を与えるものである。

評価基準(ii)

ル・コルビュジエの建築作品は、近代建築運動の誕生と発展に関して、全世界規模で半世紀にわたって起こった、前例のない人類の価値の交流を示している。ル・コルビュジエの建築作品は、他に例を見ない先駆的なやり方で、過去と決別した新しい建築的言語を開発してみせることによって、建築に革命を引き起こした。

ル・コルビュジエの建築作品は、ピューリズム、ブルータリズム、彫刻的建築という近代建築の 3 つの大きな潮流の誕生の印である。

ル・コルビュジエの建築作品が 4 大陸で与えた地球規模の影響は、建築史上新しい現象であり、前例のない影響を示すものである。

評価基準(vi)

ル・コルビュジエの建築作品は、その理論と作品において 20 世紀における顕著な普遍的意義をもつ近代建築運動の思想と、直接的かつ物質的に関連している。一連の資産は、建築、絵画そして彫刻が統合した「エスプリ・ヌーボー」を表している。

ル・コルビュジエの建築作品は、1928 年以降 CIAM（近代建築国際会議）により強力に広められた、ル・コルビュジエの思想を具現化している。

ル・コルビュジエの建築作品は、新しい建築言語の発明、建築技術の近代化、近代人の社会的・人間的ニーズへの対応のために、近代建築運動の試みを顕著に表すものである。

ル・コルビュジエの建築作品の貢献は、単に、ある時点での模範的な偉業にとどまらず、半世紀を通じて全世界に着実に広められていった建築及び文字による提案の顕著な総体である。

完全性

ル・コルビュジエの建築物が、近代建築運動の展開と影響を反映しているだけでなく、それが世界中に発信されていったことの過程を示していることを示す上で、一連の資産全体としての完全性は適切である。

個々の構成資産の完全性は、大部分において良好である。ペサックの集合住宅では、建築家のコンセプトとの調和を欠いている。サヴォア邸と庭師小屋では、1950年代に邸をとり囲んでいた草地の3方に、高校と運動場が建てられており、部分的に完全性が損なわれている。この敷地のセッティングは脆弱である。シュトゥットガルトのヴァイセンホフ・ジードルングの住宅では、戦時中の破壊や戦後の再建により、21棟のうち10棟が失われ、モデル集合住宅としての集団的な完全性が損なわれている。

ロンシャンの礼拝堂及びポルト・モリトーの集合住宅では、最近になって完全性が失われる事態となっている。ル・コルビュジエの構造物が数世紀の歴史をもつ巡礼地と重なっているロンシャンの礼拝堂では、新しいビジターセンターと礼拝堂近くの修道院が、ル・コルビュジエによる構造物周辺の山裾の思索的なセッティングを切り裂いており、重大な完全性の損失につながっている。

ポルト・モリトーの集合住宅では、集合住宅区のガラスのファサードの真正面にラグビー・スタジアムが建設された。

真実性

一連の資産は、全体としての価値が、構成資産の総和を超えることを明確に示している。

個々の構成資産の大部分についても、その属性が全体的な「顕著な普遍的価値」を良く反映していると言え、真実性は良好である。ペサックの集合住宅では、3カ所において、コルビュジエの構造物（デザイン）ではない伝統的家屋が建てられている。また、都市景観のなかにある別の場所では、管理怠慢と内装の改変によって、真実性が部分的に失われている。マルセイユのユニテ・ダビタシオンでは、2012年の火災によって建物の一部が失われた。今では完全にオリジナルのデザインに再建されているものの、真実性が幾分か減じた。チャンディガールのキャピトル・コンプレックスにおいて、既に議論されているらしい知事公邸及び/若しくは知識博物館の建設が行われることになれば、現存するキャピトル・コンプレックスの真実性が影響を受ける可能性がある。

日本の国立西洋美術館では、美術館前庭はもともと広いオープンスペースとして意図されていたようである。1999年に植えられた前庭の植栽により、建物自体、主要な景観、周辺環境の表現意図が減じられる傾向がある。

材料についても、復原された場所もあれば、管理せず放置されたり、美観が損なわれてしまったりしたあとで近年になって部分的に再建されたものもある。全体的に見れば、これらの改変は合理的で適切な範囲であると言える。（世界遺産一覧表に）記載されている他の20世紀の住宅も、同様に若干の真実性の減少がみられる。

保護・管理に係る要件

構成資産の多くがそれぞれの国において、早い段階から、たいていはル・コルビュジエの死後20年以内に、保護対象となっている。なかには、シュトゥットガルトのヴァイセンホフ・ジードルングの住宅やマルセイユのユニテ・ダビタシオンのように、ル・コルビュジエの生前からすでに保護を受けていたものもある。推薦書には個々の構成資産についての法的保護の形態が示されている。全ての構成資産が国若しくは連邦レベルで保護され

ており、緩衝地帯は法令若しくは計画的手法により適切に保護されている。20世紀建築物にとってディテールとセッティングが重要であることから、内部および外部、コンテキスト、セッティングを守ることができるように、十分に包括的かつ繊細な保護を行うことが不可欠である。

構成資産の大部分において、保全措置は適切であり、長い間継続されてきた保全の経験と方法論に基づいて行われている。保全措置は、高い技術と専門的知識をもつ専門家により計画され実施されている。保全措置とあわせて、住人や地域コミュニティ、公共の組織などにより、日常的な維持管理が行われている。ロンシャンの礼拝堂には保全上の課題があり、合意された保全プログラムを緊急に実施する必要がある。またチャンディガールについても緊急に保全計画を策定する必要がある。

一連の資産のために「常設会議」が設置されており、資産の管理に係る調整を行ったり、関係国にアドバイスをしたり、資産のプロモーション等のための活動を実施することになっている。推薦された構成資産が所在する全ての地方行政団体を集めた、ル・コルビュジエ建築遺産自治体協議会も設立された。その主な目的は、関係者間調整、普及啓発、保全に係る経験の共有、一連の資産全体の連携と管理、個々の構成資産の管理計画の実施である。

ル・コルビュジエ財団—ル・コルビュジエの作品の著作権保有団体—の専門的知識を活用することが、一連の資産の適切な管理と保全には不可欠である。特に、所有者が財団ではなく民間人である場合にそうである。フランス、スイス両国において、それぞれの国内の構成資産の管理を監督する調整委員会が設置されている。

ただ、取り扱いの難しい開発事業に関して国と国の間でどのように対話を行っていくのかが明らかでないままである。資産全体の価値を損ねることになるかも知れない開発が、あるひとつの構成資産で計画されている場合、他の関係国もそのことを知り、コメントする機会が必要となるかも知れない。

個々の構成資産について、地域ごとの管理計画が策定されている。所有者と関係地方行政機関の文化部局、遺産部局、計画部局との間でのパートナーシップにより、これらの計画は実施されている。ロンシャンの礼拝堂では、当該構成資産のセキュリティを担保するため、管理体制を強化する必要がある。クルチュット邸では、周辺での開発に対する監督を強化する必要がある。

20世紀建築の保全に関わる特有の問題を踏まえると、各国の（及び国際的）近代建築遺産保全分野の専門家が、継続的に関与することが不可欠である。スイスでは、連邦政府が各地の保全担当官を支援するため、そのような特殊な専門家に助言を求めることができる（既にそうしている）。他国でも同様のアプローチをとることが強く推奨される。

全ての構成資産において、現在の人員配置と専門的知識、トレーニングは高いレベルにあり、構成資産間の連携を可能にする仕組みが整備されている。

にもかかわらず、影響評価プロセスについては、さらなる人材育成の必要性が認められる。同様に、一連の資産を通じた保全手法及び手順をとりまとめ、明確に定義することも必要である。

スイスの2つの構成資産のために策定されたモデルとなるモニタリング指標は、2016年末まで他の資産に対しても策定される予定である。